

日本のタイルの歴史を紐解く

マンションや戸建ての外壁、室内のキッチン壁・浴室壁、コンビニやスーパーの床など、意識してみると私たちが日常生活で目にする建物にはタイルが多く使われています。そんな身の回りのあらゆるところで活躍するタイルですが、日本でどのように根付いてきたのか、その歴史をご存知でしょうか？

実は、日本で「タイル」という名称が統一されたのは大正11年（1922年）。それまでは「化粧煉瓦」「貼付煉瓦」などと呼ばれ一定の呼称がなかったのを「タイル」で統一することになり、来年、令和4年（2022年）で100周年を迎えます。

そんなタイルが日本で取り入れられるようになったのは明治時代にさかのぼります。明治時代に洋風建築が多く建てられるようになり、内装も洋風化したことで装飾タイルなどが使われるようになりました。

今回は、日本におけるタイルの歴史を語る上では欠かせない著名建造物をご紹介します。

綿業会館

昭和6年（1931年）日本綿業倶楽部の建物として竣工した綿業会館は、国際会議の場ともなった格式高い施設です。

ルネサンス風の重厚な建築様式だけでなく、冷風送気などの設備や耐火ガラスの使用など先駆的な試みをした建築ということでも評価されています。

この建物で目を引くのは談話室の壁の装飾タイルです。



京都の製造所で製造された
談話室壁の装飾タイル

甲子園会館（旧甲子園ホテル）

昭和5年（1930年）、フランクロイド・ライトの愛弟子 遠藤新の設計で建てられた旧甲子園ホテルは、皇族や政財界の要人が集うリゾートホテルでした。建物の内部・外部ともに多くのタイルが使われています。

現在は武庫川女子大学・建築学部のカンパスとして使用されています。



ホテル時代はバーだった空間。
試作品のタイルを張ったという

船岡温泉

大正11年（1922年）に料理旅館として建てられた船岡温泉。現在は銭湯として営業しています。

船岡温泉で最も目を引くのは、色とりどりのマジョリカタイル。

ミュージアムではガラスケースに入って展示されているマジョリカタイルに触れることができます、貴重な場所です。



マジョリカタイルがふんだんに使われ、とても華やか

当社の前身である「淡陶社」では、船岡温泉でも使用されている「マジョリカタイル」を製造していました。マジョリカタイルは大正時代から昭和初期にかけて全盛期を迎え、淡陶社では日本国内のみならず世界各国へ輸出していました。

このマジョリカタイルを生産する「乾式成形工法」は100年以上を経た今でもほとんど変わらず受け継がれていて、デザイン性に優れた、美しく、アンティークなタイルを製造することが可能です。

現在Danto Tileでは、兵庫県の淡路島にて、昔のデザインや製法はそのままで現代版に復刻したマジョリカタイルを1枚1枚タイル職人たちが丹精を込めて作っており、オンラインショップでの購入が可能です。



オンラインショップは
こちら



WEB上では他にも
著名建造物をご紹介します
🎵

タイル研究室
WEBはこちら



お問い合わせは
こちら

